

氏名(本籍)	杉 ^{すぎ} 山 ^{やま} 佳 ^{よし} 生 ^お (大阪府)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	博甲第1,428号
学位授与年月日	平成7年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	体育・スポーツ学習場面における練習場所選択行動と場所効果
主査	筑波大学教授 理学博士 岡田守彦
副査	筑波大学教授 体育学博士 飯田稔
副査	筑波大学助教授 博士(体育科学)中込四郎
副査	筑波大学助教授 博士(心理学)吉田富二雄

論文の要旨

場所が持つ心理学的意味を問う研究は、これまで様々な場면을対象として行なわれてきているが、体育・スポーツ学習場면을対象としたものはほとんどない。まずこれまでに行なわれてきた討論集団や教室場面などの場所を変数とする関連先行研究を広く概観し、体育・スポーツ場面に応用しようとする際の問題点、及び、本論文で対象とする研究範囲を検討した。

そこで本論文は、「体育の授業や集団でスポーツを学習する場面において、練習場所選択行動(場所行動)を規定する要因、及び、練習場所が練習参加者に及ぼす影響(場所効果)を明らかにすること、そして、得られた知見の教育場面での利用法を提言すること」を目的とした。こうした目的が大きく次の4つの視点から検討された。

- (1) 場所や他者に対する認知
- (2) 場所行動のあり方(場所行動の規定因)
- (3) 場所効果(場所が個人変数に及ぼす影響)
- (4) 教育場面での利用法

これらの各視点に基づいて下位目的(研究課題)を設定し、実証的研究、考察を行なった。

まず、本研究者は、学習者が面的分布する卓球の練習場면을研究対象として取り上げた。研究課題1では、体育館内の様々な位置にある練習場所に対する認知に関する調査が行なわれた。その結果、場所認知および他者認知が場所の関数になっていることが確認された。すなわち、異なる位置にある練習場所はそれぞれ異なる心理的環境である認知されており、特に、中央部や前方部がポジティブにそして周辺部や後方部がネガティブに認知されていた。また、異なる場所を選択した人は、他者から

それぞれ異なる個人特性を持っていると認知されていることが明らかにされた。

続いて、研究課題2では、これらの認知に基づいて決定されていると考えられる練習場所の好みと、個人特性や外的要因に対する意識との関係が検討された。具体的には、不安傾向、向性（外向性-内向性）、神経症的傾向などのパーソナリティや視覚的開放性に対する意識、あるいは体育館の出入口や教師に対する意識などが測定され、それらと練習場所の好みとの関係が分析された。その結果、ある特定の場所の好み不安傾向などの個人特性と密接につながっており、また、出入口や教師に対する意識も場所の好みと関係していることが明らかにされた。

練習場所の好みと個人特性との関係の生態学的妥当性を検討するために、研究課題3では、実際の授業で見られた練習場所選択行動と個人特性との関係を検討した。そこでは、授業で見られた練習場所選択行動が個人別に記録され、その行動傾向と不安傾向や向性などの個人特性との関係が分析された。その結果、実際の練習場所選択行動もまた、先の研究で確認された質問紙上での練習場所の好みと同様に、不安傾向などの個人特性と関係していることが明らかになった。練習場所を固定させる傾向が向性と、そして最も多く利用する区域が不安傾向や神経症的傾向などとそれぞれ強く関係していることがわかった。また、ここでは、実際の場所選択行動と練習場所の好みや利用場所の記憶との関係も調査され、質問紙調査の生態学的妥当性を吟味する際の指標を得た。

これまでは、個人変数が場所行動に及ぼす影響（場所行動の規定因）を検討するものであったが、研究課題4、5では、場所が個人変数に及ぼす影響（場所効果）を明らかにするために、利用された練習場所と練習中の心理状態との関係が検討された。授業において調査対象者に実際の卓球の練習をさせ、その練習中の心理状態（主として状態不安）を測定し、練習場所との関係を確かめた。その結果、自由に練習場所が選択できる状況においても第三者が練習場所を指定した状況においても、練習中の心理状態が、練習を行なった場所の違いに応じて異なっていることが明らかとなった。この結果は、練習中の心理状態が場所の影響を受けていることを示したものと解釈され、体育・スポーツ学習場面における場所効果の存在が確認された。さらに、様々な場所で活動することによって練習環境に対する認知が変化する可能性が示唆された。

研究課題6では、これまでの卓球の練習場面から、ゴルフの練習場面に対象を変え、類似の調査が行なわれた。卓球は学習者が面的分布をなすのに対して、ゴルフは線的分布を特徴としている。すなわち、一列に並んでショットの練習を行なう場面での練習場所に対する認知、練習場所の好みと個人変数との関係、及び、練習場所と練習中の心理状態や行動との関係が検討された。その結果、ゴルフの練習場面における場所認知、場所行動、場所効果の実態が明らかにされた。特に、視覚開放性に関連する意識や行動が練習場所の影響を強く受けていることが明らかになった。

研究課題7では、これまでの場所行動や場所効果に関する実証研究の結果を受けて、実際の教育場面で利用する方法について提案がなされた。体育・スポーツ学習場面において、場所行動を通じての個人特性の予測、より効率的な練習内容の選択、練習中の心理状態や認知の統制、といった視点に対して、本研究結果の適用の可能性が示唆された。また、卓球、ゴルフの練習場면을対象として得られた結果が、他の体育・スポーツ学習場面にもあてはまるのかどうか吟味された。

以上のように、本論文の各研究を通して、体育・スポーツ学習場面においても、教室場面などと同様に、場所や他者の行動に対する共通認識が存在していること（認知のあり方）、練習場所の好みや練習場所選択行動が個人特性や外的要因に対する意識の影響を受けていること（場所行動の規定因）、及び、利用された練習場所が練習中の心理状態や行動に影響を及ぼしていること（場所効果）が明らかにされた。そして、これらの関係を理解し、利用することによって、より効果的で快適な練習環境を作ることができる可能性を示唆することができた。

審 査 の 要 旨

体育・スポーツ学習場面における練習場所の選択行動や場所効果に関する研究はこれまで皆無であった。本論文をとおして、練習場所と練習参加者の行動や心理との関係を実際の指導場面で明らかにし、それを定量的に示したことは高く評価される。つまり、場所や他者の行動に対する共通認識が存在していること（認知のあり方）、練習場所の好みや練習場所選択行動が個人特性や外的要因の影響を受けていること（場所行動の規定因）、および利用された練習場所が心理状態や行動に影響を及ぼしていること（場所効果）である。本研究で得られた知見は、体育・スポーツでの学習指導場面で、学習者にとってより効果的で快適な練習環境を作る上で有効な情報提供となるはずである。また、本論文は、これまでなかった体育・スポーツ心理学領域での「集団の生態学（group ecology）」研究への他研究者の今後の取り組みを促進することが考えられる。

他方、問題が残らなかったわけではない。特定の場所が学習者に与える影響を状態不安を中心に明らかにしているが、さらにそのことが、学習者の行動にどのように顕在化されるのかを直接確かめる必要がある。実際の学習指導場面ではいくつかの制約が予想されるが、介入実験、そして長期的な観察を行なうことが課題となっている。また、場所行動の規定因や場所効果の検討を、ポジティブな側面や投影的手法を用いて、さらに新たな変数から確かめることも必要と考えられる。それらによって、本論文で行なっている主張をさらに積極的にできるはずである。しかし、体育・スポーツ学習場面での場所の持つ心理特性の理解を深めた本論文の体育科学における学問的意義は大きく、博士（体育科学）に十分値するものと評価できる。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。